

略奪の後

Y. G. の無題の詩に寄す

まじりけだらけのこころの内も
この夜は解き放てとささやく

まじりけだらけのこころの内も
闇を泳ぐ蝶の群れと散じる

何者も現れず、何者かが潜む
引き絞られた空間ごと滑ってゆく……

私はさながらフェリーのデッキで風に吹かれ
対岸と思われる影を見ているようだ

まじりけだらけのこころの内も
分光器でスペクトルを取り出すことはできる

まじりけだらけのこころの内も
一滴の試薬によって平衡へと動きはじめる

略奪の後に残された汚わいに^{たか}集る甲虫の羽がきらめく
連鎖の中に封じ込められたものがあつたのだ

私は呆然と立ち尽くす
それはさながら巨大な都市か蟻塚のようだ

絶望的な略奪、略奪、略奪
そしてまた……

夜が白みはじめる

(2001.10.24)